

萬龜

特別号
No.4

檀信凌会館
文由閣



わたしたちの「つながり」を問う

私たちは、さまざまな人とつながりあって生きています。家族、友人、同僚、隣人、思い起こせば一人一人の顔が浮かんでいます。しかし私たちには、目に見えていないけれど、しっかりとつながっているものもあるのです。

目に見えないつながりが、とても大切であることに誰もが気づいていくはずです。東日本大震災の後、見知らぬ土地のこと、そこで暮らす人々のこと、まだ生まれていない次の世代のことに想いを寄せました。高齢化社会では、家族を超えたつながりも考えなければならないと気づきました。東長寺はいまの時代に、この目に見えないつながりを、しっかりと結んでいこうと考えます。

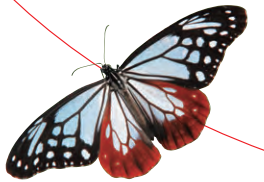
ちようげつこううん
釣月耕雲という禅語があります。曹洞宗の開祖、道元禅師が残された言葉です。雲を耕し、月を釣る。世俗を超越したお釈迦さまの境地を表現したものとも言われています。ここであえてこの言葉を次のように解してみます。釣月、すなわち人を釣り月となすこと。暗闇で迷う人が、月に照らされ、光明を得て、やがては自らが月のように闇を照らす存在になる。歴史文化はいつの時代も、こうしたつながりの中で生まれてきました。知り、学び、教えることで、次世代が育ち、それが繰り返される。こうした循環が脈々と流れてきたのです。



そして耕雲、すなわち雨を降らせる雲を耕すこと。雨はすなわち実を結ぶに必要な恵みです。成長の時代は、早くたくさん成果を得ることに終始しました。しかし、ものごとの成果には、それを実らせ、根をおろす土壌こそ大切。その土壌を活かす雨、雲こそ大切です。手の届かないところにある雲が、目の前の土壌を潤すように、地域の自然環境、社会環境を耕すには時間がかかります。しかし必ず芽が出て花が咲き、実りにつながります。それがまた環境づくりを促してゆく。こうした循環もまた営々と続いてきました。

時間や地域を越えたつながりが循環を続けることで、未来が創造されてゆきます。東長寺は、これを未来への回向とよんで、文化支援、地方寺活動支援を初めとして、その実現のための活動を続けます。

アサギマダラという渡りをする蝶がいます。フジバカマという赤い花を追い、何千キロも旅をするそうです。目に見えない赤い糸のつながりをたどるように。私たちもまた、そのような旅を始めます。



【アサギマダラ】

アゲハチョウの仲間。秋になると越冬のため、日本から台湾や南西諸島へ渡り、初夏から夏にまた戻ってくる。1日に200km以上移動する個体もある。夏から秋にかけて、フジバカマ、ヒヨドリバナ、アザミなどのキク科の植物の花に集まり、吸蜜する。



もくじ

04 住職挨拶 結ばれたご縁を次世代につなげるために

08 地方寺とのつながり

12 川原井の瓦谷山 真光寺

14 三瀬の迦葉山 清流寺

16 本吉の平磯山 清涼院

18 新しい時代の葬送法について 岡本和幸

19 「串い」の場を再生すること 霜田亮祐

20 東長寺四百二十年の歴史(了)

22 檀信徒会館「文由閣」建築設計について【IV】

24 檀信徒会館「文由閣」工事の進捗状況

25 檀信徒会館「文由閣」建立記念展

26 檀家・縁の会会員の居住地マップ

28 行持案内(平成二十七年三月～七月)



住職挨拶 結ばれたご縁を次世代につなげるために

春を迎え、窓辺に差す陽の光も日増しに輝いて参りました。冬の眠りから覚めた虫たちも、私と同じ心持ちなのではないでしょうか。

アサギマダラという蝶について調べています。寿命わずか三、四カ月のこの蝶の中には生涯をかけて北海道から沖縄までの距離を渡るものがいるそうですが、不思議なことに、この蝶は一度その経路を覚えたとその子孫も同じ経路を辿って飛ぶのだそうです。見えない運命の赤い糸という話を聞いたことがあります。この蝶も運命の糸に動かされていると考えると面白いことになります。祖先の足跡に残された見えない繭糸を頼りに、祖先の見た景色と同じものを見ながら列島を縦断する。少しロマンチックな仮説ですが、今の私には身に沁みるものがあります。

人は、現在を生きる人々と「縁」という見えない糸でつながり、さらにその糸が過去を生きた人々との「縁」という見えない糸と織り重なり合いながら、その糸を紡ぐように、編むように生きている気が致します。仏教には経（スートラ）という言葉があり、教えとは糸のようなものであると言われますが、その糸を通して力が伝わる様子、これこそが回向なのだと感じています。結ばれた縁によって人の思いが伝わり、それがさらに次の時代へと伝わっていく。私が生かされている現在、まさに過去から回向された想いによって支えられていると感じるわけです。

私は今、先代が残したその見えない記憶の糸を懸命に手繰り寄せているところです。この糸の先にはまだ見ぬ東長寺のあるべき姿、またその新たな展開があるのだと期待と緊張の日々を過ごしております。

皆さんの故郷はどこにありますか。東京生まれの私には故郷というものがありません。あえて言えば、私が学生時代を過ごした英国の地がそれにあたるかと思います。今より十七年前の三月十三日、私は初めてその地を訪れました。学業を終えてから一度も戻ることにはなかったのですが、三年前、大本山総持寺で修行させて頂く前に、自分が学生のころに見た景色を見ておきたくなり再び訪ねることにしました。

私が住んでいた場所は、市内に列車の駅が一つあるだけの小さな田舎街でした。その駅からバスに乗り、市内へと向かう車中で、私はこれまでに経験したことのない胸の鼓動を感じました。視界が次第に私の記憶と同調していきます。左右に見える景色はどれも私を大きく育ててくれたかけがえのない場所でした。思わず涙があふれ、息苦しくなると、私は初めて自分の居場所というものを感じました。これが故郷なのかもしれない。先代亡き後、自分の居場所を失ったような気だった私の根はそこにあったのだと再確認し、救われたような気がしました。

私が育った場所が成長していたことへの喜びとともに、自分のこの四年間を肯定してもらったような気がしたのです。先代亡き後、止まってしまったかのように思っていた私の時間は着実に進んでおり、何も成長できなかったと思っていた私の心も確実に変化していたのだと強く感じました。様変わりしたその街には私の後輩たちがたくさんいて、彼らがまたその場所で新たな文化をつくろうとしている。私の知っているあの場所が、次世代の人々のエネルギーになっている。

る。その景色に、私は別の場所で新たな一步を踏み出さなければなら
ないと強く後押しされたように思います。そして私が本山に上
がりましたのが三年前の同じく三月十三日。縁というのはいかよう
にも不思議なものです。

この度、多くの地方伝統工芸士の方々や各地方寺支援の関係者
および地元の方々とお会いすることで、私は多くの故郷を得たと感
じました。さらに、より広い視野で考えれば、この国、あるいはこの地
球、雲や月までもが皆とともに一つの故郷なのかもしれません。
地方寺活動支援を契機に多くの地域と人を結び付けていく、その
ような活動を行って参ります。

いよいよ文由閣も竣工間近、三カ月後には完成する予定です。暖
かい空気が流れ出すころ、梅雨の雨が降ります前に、ぜひ一度ご参
詣して頂きますよう山内一同、心よりお待ち申し上げます。

合掌

東長寺住職

瀧澤遙風







地方寺とつながります

東長寺が地方寺と縁を結び
山里の地域とも縁が生まれます。

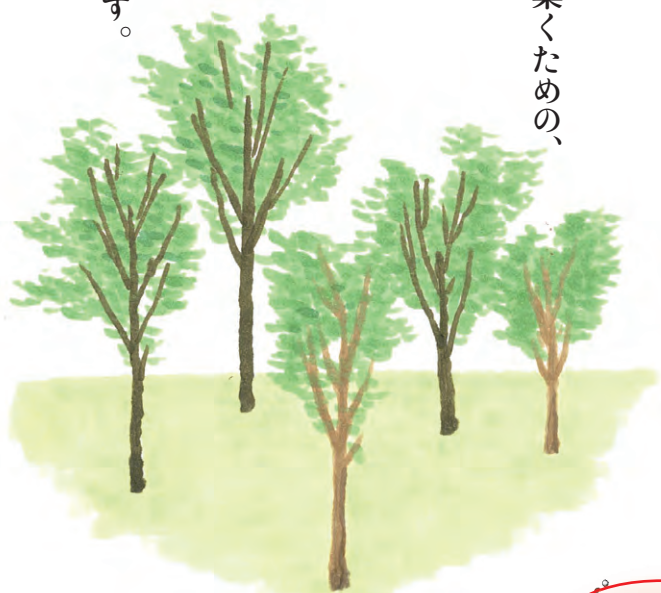
寺院は地域と深いつながりをもって存在するもの。
人と人をつなげて未来を築く触媒でもあるのです。
集まり来る人々を寺院はいつも迎え入れてきました。
そればかりではありません。これからは僧侶が地域へ出向きます。
寺院を出て、足を運び、近くの地域、遠くの地域へ訪ねて行きます。
地方の寺院と縁を結び、その地域ともつながってゆきます。



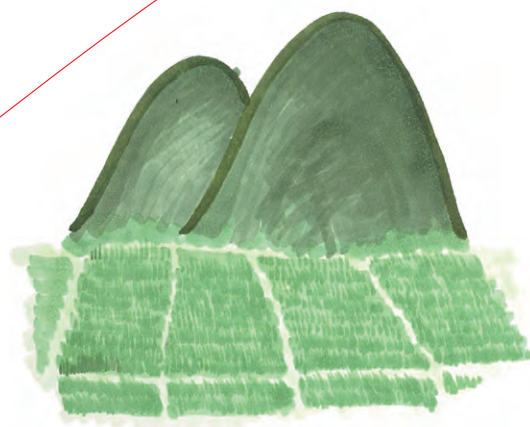
樹林葬

東長寺と縁のできた、
美しい山里の地に樹林葬として祀られ、
大地へ還ります。
その場所の風景そのものがお墓となるのです。
もうひとつが、

それが、これからの生き方や環境を新しく築くための、
大きなきっかけとなるのです。そのひとつが、



千葉県袖ヶ浦市川原井	真光寺
佐賀県佐賀市三瀬村	清流寺
宮城県気仙沼市本吉町大森	清涼院



地域環境の再生

地域社会が抱える課題——高齢化、人口減少、里山・山林の荒廃、災害復興、……
——かつて地域のことは、その地の人々だけの問題でした。

しかし今は、広く私たちの課題です。そのために地域と地域はつながる必要があるのです。それは私たちの未来のため。そのために今始めなければならぬことがあります。

「東長寺が結んだ縁を、みなさまにつなげてゆく」

東長寺が縁を結ぶ地域を、皆さまにとってもゆかりのある場所にしてゆきます。

それが山里であつたなら——東長寺は身近な心の軸となり、山里は大地に接した心の軸となりましょう。

ふたつの心の軸を皆さまの日々の暮らしとつなげてゆきます。

東長寺と地域のつながりで、皆さまと地域をつなぐ縁が結ばれたとき、皆さまはすでに、その地の未来を築く一歩を歩まれていることでしょう。



樹林葬

東長寺が縁を結んだ地方寺の墓苑で、これから徐々に樹林葬をはじめてゆきます。新しい東長寺の会員の遺骨は、協力寺院のある美しい山里の地に祀られ、大地へ還ります。その場所の風景そのものが、お墓となるのです。

ふたつのお墓をもつこと

墓地には祭祀と埋葬というふたつの役割があり、かつてはふたつのお墓があるところもありました。ふたつの役割を東長寺と地方寺に分ける仕組みもはじめます。東長寺文由閣内の納骨堂に一部の遺骨を納骨し、祭祀を行う参り墓とします。関東在住の人々がより身近にお参りできます。一方、地方寺には残りの遺骨を埋葬します。大地の元に還るのです。ふたつのお寺とつながりをもつということは、心の軸をふたつもつということです。東京四谷にひとつ。地方の山里にひとつ。四谷のお寺は身近な郷。暮らしの基盤があって、すぐに訪ねられる拠り所です。地方のお寺は大地の郷。私たちを育ててくれた大地に最も近い拠り所です。

まちと山里の回向

東長寺が地方寺と縁を結ぶことは、多くの人がまちと山里の間で縁を結ぶことにつながります。この山里は遠く私たちを育ててくれている大切な環境。しかし、手放して継続されるものではないのです。ゆかりのある人が増え、山里の大切さが意識され、自然環境や経済の循環が保たれてはじめて、未来へと続いてゆく環境なのです。





かわはらいがこくさんしんこうじ 川原井の瓦谷山真光寺

千葉県袖ケ浦市川原井

〔写真提供〕真光寺（上から2点目除く）



千葉県袖ケ浦市街から房総半島の内陸へ10 km。山里の丘の上が真光寺の境内です。美しい緑と見晴らしの良い丘。東京湾からさほど離れていないのに、大自然の原点に立ち戻れるような豊かな環境が広がっています。ここは里山。田畑や山での人の営みがあつてはじめて生態系が維持される環境です。私たちもまたひとつながりの自然なのです。真光寺では、人が大地へ還る樹木葬をはじめ、人が自然とともに生きる里山の再生活動が行われています。

『大都市近郊の寺院のあり方を追求したいと思い、この地に足を踏み入れました。都会の人にとっては失われた環境が得られる場所、地元の人にとっては地域再生の一助となる寺院のあり方です。里山は田んぼづくりが基本。なぜなら里山は水の循環が最も重要だからです。地域の檀家の皆さまとはとても良いつながりができました。しかし都会の人々の理解と協力無しには、このような環境を維持してゆくことはできないと考えています。寺院は都市とこの地をつなぐ触媒になりたいと思います。』



真光寺住職 岡本和幸
おかもと・わこう



東長寺と真光寺のご縁

東長寺の僧侶、岡本和幸師が1994年、それまで20年以上無住の寺であった真光寺に住職として入山したのがはじまりです。岡本住職は、自らの手で老朽化した旧本堂を修復し、崖地も整備。境内に繁茂した竹林を伐採するなどして真光寺を蘇らせました。ほどなくして境内脇を流れる大月川流域の自然環境調査をはじめたところ、良い自然が残っていることがわかりました。そこで里山の再生活動がはじまるのです。

真光寺の歴史

伝えによると、真光寺から南へ5kmほどのところに房総武田氏（甲斐武田の分家）の本拠、真里谷城があり、その菩提寺が真如寺。この真如寺の八世、鷹山殿召大和尚によって1556年に開かれたのが真光寺といわれています。真光寺のほど近くには川原井城があって、どちらも武田氏の庇護のもとにありました。

川原井ということ

ここはかつて川原井村と呼ばれました。袖ヶ浦、木更津に流れ込む小櫃川（おびつがわ）支流に広がった里山です。田畑と川と山の景色は、日本人の記憶に宿っている懐かしい風景。四季を感じながら自然とともに暮らせる豊かな地域です。しかし、近隣には山を崩した土取場や、ゴルフ場があるのも事実で、地域の将来は慎重に検討してゆかなければなりません。

真光寺の取り組み

樹木葬

自然とひとつながりである私たちが大地へ還ること。里山の森を育てていくこと。そのために真光寺では早くから樹木葬に取り組んできました。2005年に樹木葬墓苑の認可が下り、その翌年には境内の丘陵部に植樹もはじめました。

里山再生

寺の脇を流れる大月川の源流域では、かつて水田が広がっていましたが、農家の担い手が減り、しばらく耕作が放棄されていました。2004年、真光寺は田畑の再生開墾を開始。耕作地は年々増えて現在二町五反（約15ha）。水田の再生によって動植物が戻り、里山の生態系が回復します。耕作地では田植えから稲刈りまで体験学習も行われ、里山の理解を広めています。



真光寺境内



大月川流域の里山



大月川流域の里山での稲刈り



三瀬の迦葉山清流寺

佐賀県佐賀市三瀬村

〔写真提供〕清流寺(写真1-5)



佐賀と福岡の県境の豊かな森が、清流寺の舞台です。水がきれいで、森の随所に湧き水や清流が流れているところ。その流れはやがて佐賀市街を抜けて有明海までつながっています。山地の主峰は脊振山^{せふりさん}。古くから修験道の聖地とされてきた霊山です。ここは自然が豊かなだけでなく、濃厚な歴史が醸成されてきた場所でもあるのです。いま脊振山一帯は県立自然公園の指定を受けた、観光エリア。自然と歴史を次の世代につなげてゆく地域の取り組みがはじまったところです。清流寺の活動もそのひとつ。

『頭から離れない言葉がこぞいます。それは先代住職瀧澤和夫師の「これまでの形を残してゆくには、新たなことをはじめなければならぬ」という言葉。この言葉を反芻しつつ、私は東長寺での十一年の勤務を通じて、将来の寺院や僧侶のあり方を問い続けて参りました。今、地元佐賀清流寺にて、寺院活動の見直しを含め、森づくりや自然景観保全、寺院周辺の地域づくりや地域ブランドづくりといった、これまでの葬儀や法事に終始した寺からの脱皮を目指したいと思っています。そのために、寺院、檀信徒、地域住民、行政とのつながりをより確かなものにながら、活動を進めて参る所存です。』

清流寺副住職 光吉和美

みつよし 和美



東長寺と清流寺のご縁

東長寺でお勤めをしている光吉和美師が、実家である清流寺の副住職でもあることから、東長寺とのご縁が生まれました。東長寺における縁の会などの新しい供養の考え方や多くの活動、イベントなどを通じて僧侶が体得した、新しい寺院のあり方を清流寺でも模索していこうとしています。



清流寺と観音寺の歴史

清流寺の開山は1386年とされ、現住職で二十五代目です。かつて鍋島氏と親交があり、歴代の鍋島藩主のお位牌が祀られています。本寺は大本山總持寺直末、佐賀市大和町玉林寺で、歴代の清流寺の住職も数名みられます。

また、三瀬で最古の観音寺とは、戦国時代、佐賀北部や三瀬を治めた神代勝利の嫡男、長良が祀られている寺院です。佐賀の龍造寺といく度も敵対するも和睦。鍋島氏と縁組みし領地を守りますが、後に藩主となる鍋島氏より領地替えを命ぜられこの三瀬の地を去ります。その後、観音寺は1963年火事で焼失し清流寺に合併となりました。

三瀬というところ

清流寺のある三瀬村は、佐賀と福岡の県境に連なる筑紫山地・脊振山系の山間部にあります。この山々は、北の玄界灘に注ぐ川と南の有明海に注ぐ川を分ける分水嶺。源流が湧き出る自然豊かなところ です。深い森が生態系を育み川に養分を与え、川は佐賀平野を潤し、有明海に注いで海まで養分を運びます。大きな自然の循環が営々と続いてきた場所です。

豊かな自然と共存した暮らしは近年注目され、移り住む人もいっしょにいます。蕎麦店、地産野菜の販売所、山あいの喫茶店など人気店もできて、観光客の関心を集めています。

清流寺の活動

脊振千年の森づくり

佐賀は昭和にスギ、ヒノキ植林を日本一多く行った県で、すでに伐採の時期を迎えているにもかかわらず、林業の低迷によって山の手入れが止まっています。森林は荒廃してゆくばかり。そこで清流寺では森の再生活動「脊振千年の森づくり」をはじめます。間伐を進め、広葉樹を植えて混交林に変え、生態系を回復するのです。

観音寺跡地整備

現在、焼失した観音寺跡地は竹藪がはびこり荒れたまま。しかし、この地域の歴史が刻まれた場所であり、重要な墓石が残っています。そこで清流寺は、この地を整備し、長らく見守っていただいた地元へ恩返しをして参ります。

脊振仏教センター

この地域の寺院、僧侶とともに東アジアの仏教者が共同して、仏教や寺院の未来を考え、人と仏教のつながりを捉え直す拠点をつくるべく計画しています。この地の環境を活かし、仏教体験、自然体験、農業体験を通じた現代人の生き方を追求する場所でもあります。脊振山系一帯は、修行僧が暮らす山岳密教の修験場でした。学び、体得する場所として縁の深い地域です。





もとよし へいぎさんせいりょういん 本吉の平磯山清凉院

宮城県気仙沼市本吉町大森

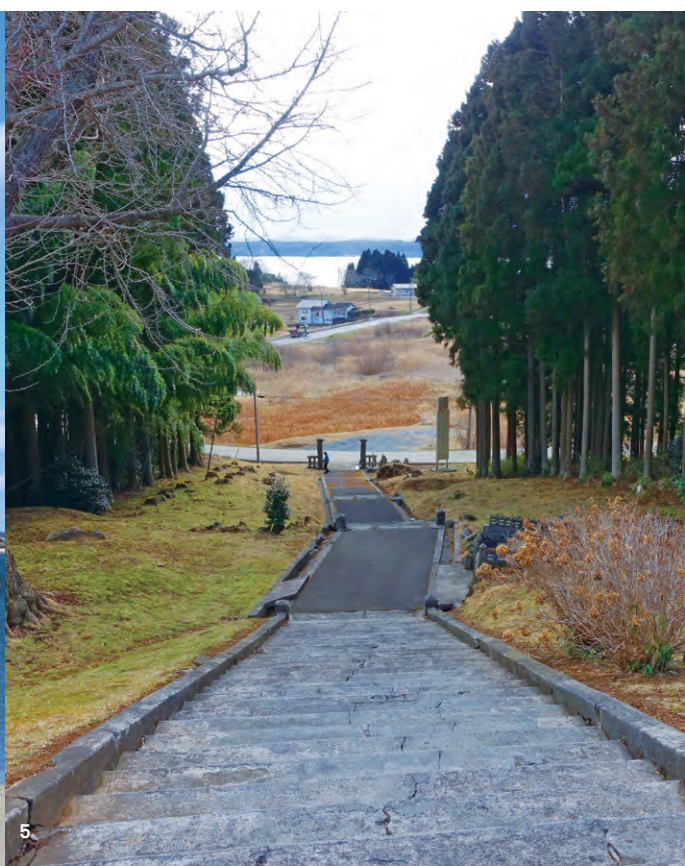
〔写真提供〕白鳥孝太／シャンティ（写真4）



三陸海岸を望む山の上に、清凉院があります。大きな石段の先の本堂を目指して、深い杉本立の間をのぼりきり、振り返ると、すでに美しい海岸が見えています。この海岸は三陸の国定公園。宝物のような海と山に接しながら、四〇〇年以上の歴史を刻んできた寺院です。東日本大震災ではかろうじて津波を免れ、避難所の役を果たしました。当時は、やり場のない気持ちを抱えた人たちと、ときには酒さえ酌み交わし、体ごと向き合い続けたと聞きます。そんな僧侶たちのいる寺院です。

『この寺が避難所であったとき、電気もガスも停まり、墓地の塔婆さえ燃やして暖をとりました。この地域の人々はなりふり構わず生き抜いたのです。生き残った者は未来のために、何か動かなければなりません。もちろんこの寺も。寺を単なる風景にしたいわけではありません。人と人をつなげるひとつの媒体として活動をはじめたいと考えています。寺院とは元来、人が集まって学んだり、芸能を興したりした場所。その本来の姿を取り戻していききたいと思っています。』

清凉院副住職 三浦賢道
みうら けんどう



東長寺と清涼院のご縁

現副住職三浦賢道師がかつて、新しい考え方に共感して東長寺へ入山。再び清涼院へ戻られてまもなく、東日本大震災に見舞われました。東長寺の僧侶は清涼院に駆けつけ、いく度となく復興支援を続けました。この時のご縁が今も続いています。町は瓦礫こそ片付いたものの、まだまだ夜は暗いまま。復興はこれからです。東長寺は復興の一助となる活動を続けていきます。そして同時に、東長寺と清涼院のつながりをきっかけとして、多くみなさまにこの地域との縁が生まれますようお願いしています。みんなでこの地域環境を再生し、みんなでその豊かさを享受する。新しいつながりこそが未来を築いてゆくものと信じています。

清涼院の歴史

寺の歴史は古く、開基は四百数十年前。寺の伝えによると、1596年竹厳光頼和尚によって開かれました*。戦国時代も終わりの頃、まもなく江戸幕府が開かれ大阪城落城を迎える時期でした。開創当時の檀家は無縁となった諸藩の武士だったとも言われています。1770年頃、敷地を寺坂から現在の大森に移し、現在に至っています。

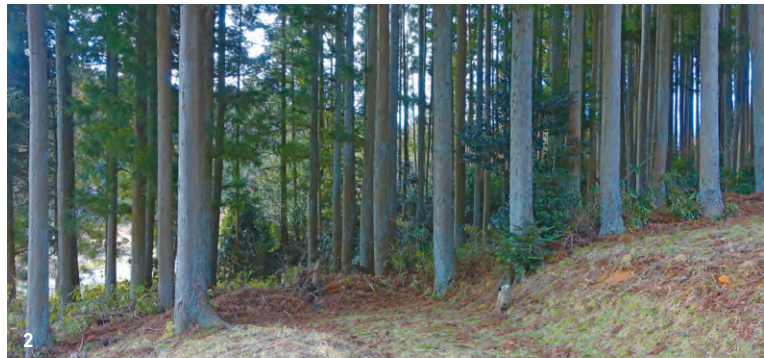
*別資料「寺院書出」によると、1558年本厳元州によって開かれたともされている。

本吉というところ

清涼院のある本吉は、宮城県気仙沼市街から南へ十数キロのところにある海辺の町。海岸は大部分が南三陸の国立公園に指定されている風光明媚な地域。浜には漁師の小舟が上がり、豊かな海とつながった暮らしが見えます。浜からすぐに丘や山が連なり、山里が広がるのは三陸特有の風景です。

震災復興

東日本大震災直後、高台にある清涼院は避難所として被災者を支援しました。まもなく曹洞宗に由来するシャンティ国際ボランティア会(SVA)の支援拠点も、境内に設置されました。SVAの復興支援は今なお続いています。今後この会から派生した子どもをサポートするNPO「あつまれ、はまわらす」(浜の童という意)も清涼院で活動します。災害をもたらした海を遠ざけるのではなく、しっかりと向き合い共存してゆくこと。そのために海の楽しさと生きる力を子どもたちに教える活動です。清涼院の復興支援は続きます。



- 1 清涼院境内
- 2 参道沿いの林
- 3 本吉町前浜
- 4 本吉町日門海岸
- 5 清涼院境内から海を望む
- 6 清涼院参道

新しい時代の葬送法について ―岡本和幸「東長寺前住職／現・真光寺住職」

現代社会の大きな問題として、地域コミュニティの崩壊と、人間同士のコミュニケーションの不足があると思います。このことは葬儀を考える上でとても重要です。

元来葬儀は地域コミュニティの中で醸成されてきたもので、今日行われている葬儀法は、宗教主導で確立されたわけではありません。昔ながらの習俗が残る地方の葬儀を見ると、宗派が違ってても儀礼の流れはほとんど同じであり、中には仏教の教理と矛盾するものも含まれていたりするのがその証左であるように思います。

人は十月十日という時が満ちれば自然に生まれ、寿命が尽きれば死に、肉体はもとの要素に分解されて無為の自然に還ります。しかし、私たちが生きているのは有為の世界です。死はこの上なく恐ろしく、また死の結果残された骸は扱いが厄介なものであることから、「穢れ」という考え方をもって忌避されてきました。一方、故人の人格は「魂」や「霊」という形でとどまると考えられ、残された人々は、そのはざままで右往左往します。

端的に言えば、有為なる遺骸と人格を無為の自然へと返す方法として行われるのが葬儀です。仏教の葬送法は、故人を仏に昇華させ、祈りによって送る形をとっています。日本では人の死をめぐる一連の作業に、かつてコミュニティの中で一定の役割を果たしてきた僧侶が関与することによって、葬儀と僧侶のつながりが強固なものと

なりました。葬送儀礼の中では、喪主や親族、地域の人たちから会葬者に至るそれぞれに役割があり、人々はそれを果たすことによって故人を送り出す気持ちを示します。

従来はそうにして通夜葬儀から何年かごとの法事に関わっていくことで、故人が成仏して無為の世界に入っていくのを見守ると同時に、自らの存在意義も再確認できたのであろうと思います。

コミュニティが崩壊してしまった今日、葬儀のもつこうした役割も失われたということがよく言われていますが、果たしてそうでしょうか。一国の王子として何不自由なく暮らしていた若き日のお釈迦さまは、お城を出て初めて目にした老人や病人の姿に衝撃を受けました。さらに肉親の死を嘆き悲しむ人々の葬列に出会ったことにより、安楽な生活を捨てて修行の道に入ることを決意したという話があります。しかし、この話を持ち出すまでもなく、死は私たちに大きな教訓や示唆を与えてくれます。

科学技術の発達に伴い、人が病に苦しみ、死に至るまでの現実が隠蔽され、命の大切さが見えなくなっている時代だからこそ、ともに悲しみ、ともに祈り、有為なる死を無為なる死へと昇華させ、残された人々が心の安寧を得られる現代化された儀礼の必要性を痛感しています。

「弔い」の場を再生すること ― 霜田亮祐「株式会社ヒュマス代表」

都市の多死問題

人口の密集する都市は多くの人々の生きる場所でもあります。同時に死ぬ場所でもあります。活動の舞台は多く用意されていますが、死のための場所は限定的です。宅地と同様に墓地の「開発」のために郊外の山林を造成し、環境破壊が繰り返され、本来であれば生活の場の近くにあるべき「弔いの場所」の隔離化と不足が進んでいるように思います。実際、都市における墓地不足や死者数の増加に伴う火葬場不足、いわゆる「多死問題」が露呈しています。東京都の場合、約一三〇〇万人の人口の内、年間に十一万人、一週間に平均二〇〇〇人近くの方が亡くなっています¹。こうした増え続ける死者と埋葬方法、そして弔いの場所の在り方については日本のみならず世界の大都市における普遍的な課題であります。

コロンビア大学大学院建築学部「DeathLab」は「死の民主化」を大きなテーマとして先進的かつ都市の本質的な課題に対する取り組みをしています²。従来の土葬や火葬ではなく環境負荷の少ない遗体処理方法の革新により墓地を小型化させ、「弔いの場所」を生活に近づける建築、都市デザインの提案をしています。

地方の問題

地方の寺は家族経営が多く、後継者が見つからない場合、永続的な寺院経営は難しくなります。人口流出、出生率の低下、そして高齢の信者は亡くなり、寺院経営を支えてきた檀家制度は崩壊の一途を辿っているといわれます³。

地方寺院の荒廃が意味することは宗教を中心としてあった共同体や周囲の自然環境といった社会関係資本も失われるということです。かつての集落では、生活の舞台である里海、里山環境を維持するための地域共同体の中心に仏教がありました。お坊さんが森林整備や治水工事などに自ら汗をかき、集落の人々がそれに協力することもあったといいます。そうした関係が崩れること、次代の担い手が不足することで、地域の環境が荒廃する日が近づいていることを、現在、計画設計を進める地方寺の現場でもひしひしと感じています。

「弔う」ことの変化

『萬亀』特別号No.3に紹介されている地方寺における「祀り墓」、都市における「参り墓」という現代的な両墓制の再生は、都市の墓地問題を解消し、地域の環境を再生・持続するしくみを前提とした死者を「弔う」場の在りようを再考させてくれます。人は骨そのものというより、故人の思い入れのある土地や自然環境に対して弔いたい、という社会的認識の変化が起きていることを感じます。東長寺は、個人向け永代供養墓、ならびに、地方寺における樹林葬墓苑などにより現代とこれからの多死社会に対して、課題の解答と同時に新たな価値観を提案しています。なによりも、仏教の絶対的な信用システムがあるからこそ、本来的な「弔い」の場を再生し、数百年〜千年以上、守り続けることができるものだと思います。

1―東京都福祉保健局「東京都における出生・死亡・死産・婚姻・離婚の年次推移」平成25年 | 2―「死を民主化せよ〜コロンビア大学建築学部DeathLabの挑戦」、『WIRED』vol.14、2015年1月 | 3―高橋卓志『寺よ、変われ』岩波新書、2009年

しもだりょうすけ

ヒュマス代表。1974年生まれ。埼玉県宮代町出身。千葉大学園芸学部卒業、同大学院修了。ハーバード大学デザイン大学院ランドスケープアーキテクチャ学科修了。米国内設計事務所勤務、10年間の都内設計事務所勤務を経て、2013年、株式会社ヒュマス設立。東長寺の檀信徒会館造園設計、地方寺の樹林葬墓苑計画設計に携わる。千葉大学、横浜国立大学でランドスケープデザイン教育の非常勤講師として教鞭をとる。

東長寺四百二十年の歴史(了)

東長寺が開創されて四百二十年。その歴史を振り返ります。東長寺寺報「萬龜」VOL.5(一九八七年九月)、VOL.6(一九八八年月)に掲載していた歴史の再録です。

文化文政年中(一八〇四〜三〇)は俗に化政の

時代とよばれ、江戸文化が最も花開いた時期であるという。百姓町人の学問に対する熱意は武士階級のそれに負けず、江戸府内のいわゆる学問寺が隆昌した時代である。東長寺も学問寺であり、江戸期における最隆昌期を迎えたと推定される。

嘉永元年(一八四八)、東長寺境内の西「貳百九拾四坪」を託法寺(真宗)に賃貸した。託法寺の寺伝によると、寛永十一年(一六三四)三月に浄円(俗姓本多)が当地に開創したと記しているがこれは誤りである。

『御府内沿革図書』によると、

「――嘉永元年甲年中より境内西の方託法寺へ貸地願済候由ニ有之」と記されている。

延宝年中(一六七三〜八二)、享保十一年(一七二六)、安永二年(一七七三)、六年(一七七七)等の絵図に託法寺の記載はなく、万延から文久年中(一八六〇〜六四)の絵図にのみ記載されていることから、寛永十一年の当地開創説は誤りである。

もし寛永十一年開創説が正しいとすれば、東本願寺の塔頭として開創され、嘉永元年に東長寺の境内地を借地して移転したとみるべきだろう。この託法寺は大正十一年(一九二二)杉並区に移転した。

安政二年(一八五五)十月、江戸大地震が起った。「安政の大地震」がそれである。江戸府内の多くの寺院が損壊し、これ以後数年にわたって諸堂宇の修

復、再建等をしているが、東長寺にはその記録はない。

文久三年(一八六三)、東長寺は「境内作事絵図面」を幕府に提出しており、その現物が『諸宗作事図帳』に残されている。この絵図によると『寺社書上』に破壊して礎定だけが残っていると記されていた中門が再建され、本堂はやや大きくなっている。東長寺北側の東の端に入口があり、これを入ると右手に門前町屋跡、惣門をくぐり右へ曲がって中門を入る。正面右手が本堂、左手が庫裡になっている。鐘樓堂は本堂の右手、鎮守堂(護法稲荷)はその裏になっている。また中門を入って右へいったところに「式間 五間」の庵室がある。この庵室は文政十年にはなかったもので、その後建立されたものだろう。

「境内拝領地 貳千貳百七拾七坪

表間口 五拾五間

奥行東 四拾五間五尺

西 四拾七間四尺

南 四拾六間二尺」

と記されている。

慶応三年(一八六七)、十五代將軍慶喜によって大政が奉還された。徳川幕府の崩壊である。翌慶応四年(一八六八)、明治と改元された。

徳川幕府の崩壊は武士階級社会の崩壊である。

江戸時代を通じて東長寺と檀越関係にあった諸藩士の多くは、江戸を離れて郷土へ帰っていった。

この明治元年一月十五日、東長寺が焼失した。本

尊の釈迦三尊をはじめ諸尊像は免れたが、諸堂宇のすべてが焼失した。しかも、明治新政府が樹立されると神仏分離令が公布され、全国に廃仏毀釈運動が広がっていった。旧弊を打破し、神武天皇創業に復古するという「王政復古」による神祇崇拜の風潮によるものだが、この運動によって多くの寺院や仏像が破壊され、廃寺となる寺院が続出した。

江戸時代を通じての多くの檀家を失い、諸堂宇を焼失した東長寺の近代史が、こういった荒廃の極に達した状態から始まったのである。

明治三年(一八七〇)六月、第二十八世玉英が東長寺へ入寺した。五年(一八七二)の『本末一派寺院明細帳』によると、

「大阪府管轄摂州西成郡谷町商岡村屋嘉蔵次男 嘉永二己酉年四月八日於兵庫県管轄同州有馬郡三輪村来迎寺得度 元治元甲子年夏大阪府管轄摂州能勢郡宿野村桂林寺而首職 明治三年六月当寺江入院仕也」

と記されている。

このとき玉英は数え二十六歳の青年僧であった。明治四年(一八七二)上地令が出され、東長寺の境内地は官有地となった。宗門人別改、寺請制度が廃止されたのもこの年である。この寺請制度が近世仏教の布教に大きな貢献をしたが、その反面、生まれたときにもう葬られる寺院が定められているわけで、いかに個人信仰の自由を奪うとい

う一面があったことも事実である。たとえば東長寺で坐禅を組み、東長寺で学び、東長寺の住職に帰依していても、葬られるのは代々の寺院と決まっていた。江戸時代の庶民信仰の隆盛の背後には、人別改、寺請制度があったのである。この時期に極度に檀家数が少ない寺院をみかけるが、これは檀家による菩提寺替えによるものである。

明治五年（一八七二）に提出された『本末一派寺院明細帳』によると、東長寺の檀家数は「百廿五軒」と記されている。江戸府内寺院のこのときの檀家数では上位に入れられる。この「百廿五軒」という数字は、旗本や諸藩士などのように離檀せざるを得なかったものを除くと、東長寺を離れて他宗寺院に移ったものがまじりなかつたことを示している。明治元年の火災によって諸堂宇を消失し、仮本堂と庫裡がわずか「四十三坪」という東長寺が極度に荒廃した時期のことである。東長寺と檀家の間に緊密な関わりが生じていた証左といえよう。

明治七年（一八七四）、東長寺は周辺十三か寺に墓地を賃貸した。その十三か寺とは、長善寺、養国寺、全長寺、永昌寺、長龍寺、長泰寺（以上曹洞宗）、正応寺、西応寺、真英寺、林光寺、善慶寺、源慶寺、法雲寺（以上真宗）である。

このときの境内地は官有地であり、東長寺が国から借りていたわけで、当時の東京府知事・大久保一翁（忠寛）宛に願書を提出し、その願書が許可になったときの『御請書』が残されている。

「今般願之通、右拾三箇寺示談ノ上、境内墓地続之場所貸渡、埋葬為致度段奉願候処、御聞届ニ相成、難有奉存候、右墓地之名義ヲ以都合之取計

致間敷旨御達之通、謹而御請申上候也

七年十月五日

東長寺住職

嶋崎玉英 印」

明治維新後、法令によって土葬が許可される地区と不許可の地区にわけられた。

「墳墓地土葬許可ノ儀ハ、嘗テ朱印ノ内外ニ依リ相定リ居候儀ニテ、今般改正郡区ノ経界ニ抱ハラズ、従来ノ朱印経界之通タルベキハ勿論ニ候得共、自然郡区改正ノ際、随テ土葬区域モ変換候様相心得候者有之候テハ不都合ニ付、心得違之者無之様、郡区内へ可申示置。為念此旨相違候事」これは、東京府から郡区役所に出された「乙第四二号土葬許可区域」の布達書である。

朱印内、朱印外の境界がどこなのかについてはいろいろな説があり断定することはできない。『日本史辞典』（角川書店）によると「江戸時代、江戸の地図に府内と府外の境界を朱線で引き、区分していた」というのだが、朱印外でも江戸府内といわれる地区も多い。東長寺は江戸府内であるが、朱印は大木戸あたりであり、朱印外なので土葬が許されたと思われる。菩提寺が朱印内にあったからといって、簡単に土葬から火葬に切り換えることはまず不可能であり、納得しない檀家が続出したのではないだろうか。そこで十三か寺側が東長寺の境内を賃借して墓地としたのだらう。しかし、これは十三か寺側からみた場合のことで、荒廃の極に達していた東長寺からみれば、境内を十三か寺に賃借することによって、寺院を護持する一助とするのが当時の最良の方策であったはずで、喜んで賃借したわけではない。

明治新政府の基盤が確立したといわれる、明治

八年から十年（一八七五～七七）にかけて、各寺院から『寺院明細簿』が提出された。寺院に与えられていた諸々の特権をとりあげ、境内地を官有地にしたうえで、さらに寺院の財産しらが行われたわけである。そのことは是非はともかくとして、寺院史の調査の上では非常に貴重な資料となっている。

これによると、四十三坪の仮本堂（庫裡共）に、

「本尊 釈迦牟尼仏木像 一軀

脇立 文殊菩薩木像 普賢菩薩木像 二軀

達磨大師 一軀

但位牌付 一軀

大権尊 一軀

但同 一軀

観音尊 一軀

勢至尊 一軀

の七軀の尊像を安置していたことがわかる。

これを文政十年の『寺社書上』とくらべてみると、本尊の脇侍が迦葉尊者、阿難尊者から文殊菩薩、普賢菩薩にかわり、阿弥陀如来、出山釈迦がなくなり、勢至菩薩が新しく加えられている。

明治元年の火災のおり、本尊をはじめ達磨大師、大権尊、観音菩薩尊の尊像は運び出したものの、他の四軀の尊像は焼失してしまったものと思われる。当時の状況下で、わずか五年間に文殊菩薩、普賢菩薩、勢至菩薩を安置している。しかも、檀家数は「百八十五戸」に増加している事実には驚嘆する。明治五年以降、六十家も檀家が増加しているのである。玉英の文字通り筆舌に尽くせぬ労苦の賜物といつてよい。

これが東長寺の近代史の第一歩であり、現代史にいたる序曲となっているのである。

檀信徒会館「文由閣」建築設計について「Ⅳ」手島涼仁「東長寺寺務長」

これまで、現在建設中の「文由閣」の特徴について、地中熱を利用した空調設備、免震装置を導入した構造デザイン、そしてパッシブハウス認定を目指した断熱気密性能と題して三回にわたり掲載して参りました。今回は、都市内の自然環境の回復を目指す緑化技術の特徴を説明させて頂きます。「建築設計について」と題した本コラムの最終回となります。

皆さんは「ランドスケープ」という言葉を聞いたことはありませんでしょうか。辞書を引きますと、名詞として「景色、風景、見晴らし、眺望、風景画」、動詞として「美化する、緑化する」という言葉が出てきます。今回は、この「ランドスケープ」という言葉をキーワードとして取り上げることに致します。

日本には古くは「作庭^{さくてい}」という技術がありました。京都など有名寺院の日本庭園に見られる庭のつくり方です。「池泉回遊式庭園^{ちせんかいゆうしきていえん}」や「枯山水^{かれさんすい}」など、一度は目にされたことがあるのではないのでしょうか。これらの一部は、本来ある自然の姿をある限られた場所に再現することを目的としてつくられたものです。たとえば京都にある庭園の多くは、京都の都市構造（三方の山々や鴨川、南側の開けた空間）や名勝（松島や天橋立など）と呼ばれる場所を模倣しています。また、中国の神仙思想^{しんせんしやう}「1」を土台としたものもあります。昔は御存知のように発達した交通機関などなく、日本や世界各地に気軽に旅行に出かけることは不可能でした。そこで、そのミニチュア版を都市内の庭園に再現したといえるでしょう。そしてその庭園の随所に仕掛けを施しているのです。これらは俗に日本では「造園」と呼ばれています。今後、庭園などをご

覧になる際は、意識して見てみるとご理解頂けると思います。

さて、本日の本題であるランドスケープは、一体どのようなものなのか述べて参りましょう。ランドスケープは、正式にはランドスケープアーキテクチャ、あるいはランドスケープデザインと呼ばれています（以降、ランドスケープデザイン）。造園はランドスケープデザインの一部ではありますが、すべてではありません。造園は、「園」という字が入っているように囲まれた範囲の中で、自然素材を活かした人為的操作といえます。これに対してランドスケープデザインが標榜する空間は、囲いがなく（もちろん特定される敷地というものはあります）、都市空間あるいは地域へと広がりを見せ、自然素材だけを扱うわけでもありません。

日本におけるランドスケープアーキテクトの第一人者である宮城俊作氏²は、自著³の中で、ランドスケープとは、「我々を取り巻く環境のある状況を指しており、その状況のもとにおいて、人為的に表象されるものと、現実の環境において表象が志向する対象との間に、我々の感覚を媒介としたコミュニケーションが成立していること」と述べています。分かりやすく解説すると、たとえば風が吹いているところに（我々を取り巻く環境のある状況）、風車をつ置き（人為的に表象されるもの）、風が吹くことにより風車が回っているのを（現実の環境において表象が志向する対象）、見ることで風が吹いているということを認識する（我々の感覚を媒介としたコミュニケーションが成立している）となります。このような意図をもって与えられた敷地をデザインしていくことが、ランドスケープデザインということになります。よってその対象となる敷地は、個人住宅の庭からマンションなどの集合住宅、公共施設、

1 ― 飛鳥時代に輸入された中国の思想。不老長生を最大の目的とする。

日本庭園においては、長寿のシンボルである鶴亀のモチーフ、池泉中の神仙島や蓬莱山に見立てた築山、築石が特徴。

2 ― 奈良女子大学生活環境学部教授

3 ― 『ランドスケープデザインの視座』学芸出版社

街路や公園、またニュータウンなどの大規模な空間に拡がることもあり
ます。デザインの手掛かりになるものも、空間的、時間的に広がり
をもちます。その敷地が自然的な状況にあるのか、あるいは住宅密
集地や高層ビル群の中など人工的な状況なのか。また、敷地や地域
の歴史的由来、現在の社会情勢や建築物とのデザインの調和など、
さまざまな事象を複合的、階層的に検討することが求められます。
そして多くは建築家や都市計画家など、他の専門分野との協働作
業（コラボレーション）を行うことが職能の中心となります。

今回、「文由閣」のランドスケープデザインは、以下の調査をもとに
進めてまいりました。

①広域の地形と水系における敷地の位置付け

敷地は武蔵野台地の淀橋台に属し、標高二五mから二八mの高台
となっている。

・地形的には神田川支流の紅葉川の上流部（現在は暗渠化）の谷頭付
近に位置している。

②都市の変遷と地形からの敷地の位置付け

・明治初期の地形図から、もともと谷筋を利用した蓮池や水田が
あったと推察できる。

・関東大震災後には外苑西通りが建設され、東長寺や周辺の社寺の
敷地が分断された。

・二〇二〇年東京オリンピックの時期に、靖国通りが拡幅される。

①と②の調査結果により、ランドスケープデザインの方角性を提
示すると、

・そこに在るべき植生の回復（水田の畦の自然植生を再生）

↓「アゼターフ」という在来種（草本種）を植えこんだ植生マットを、
建物周囲に設置

・地形の起伏を利用した可視化の強化（道路沿いのフェンスや法面の土留

めのデザイン）
↓「フトンカゴ」という鉄線でつくられたカゴに石を詰めたフェンス
を設置

と、なります。特に「アゼターフ」はスミレ、ホタルブクロ、ウツボグサ、
カワラナデシコ、キキョウ、オミナエシ、ミソハギ、オニユリ、オトギソウと
いった、昔、畦道に生えていた草本類を多く導入する予定ですので、
花が咲く季節には来山者を温かく迎えてくれるでしょう。また、紅
葉川があったことに因んで、建物周辺には紅葉類を二〇本以上植え
る予定にしており、秋には色付く文由閣をお楽しみ頂けるでしょう。

以上、文由閣におけるランドスケープデザインの特徴を述べて参り
ました。ランドスケープは移ろいゆくものです。一日の中でも朝と夕
方では違う表情を見せます。また、春の新芽、真夏の花々、秋の紅葉、
そして冬枯れと季節とともに移り変わります。これはまさに「無常」
というものです。移ろいゆく文由閣の木々や草花を楽しむに来山し
て頂ければと思いつ、四回にわたりご案内してきた檀信徒会館「文
由閣」の建築の特徴と題した特集を締めくくらせて頂きます。



出典：明治前期測量中央官衙町2000分1彩色地図
財団法人日本地図センター
上記を現在の道路地図の線形と重ねて加工処理

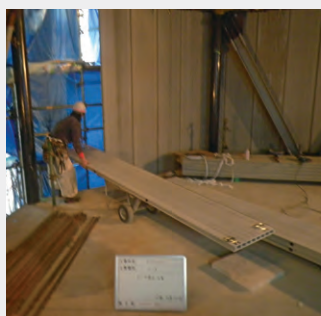
檀信徒会館「文由閣」工事の進捗状況

昨年一月の着工から、事故もなく順調に工事は進み、間もなく完成を迎えます。極力エネルギーを消費しない「パッシブ建築」のありようを追求した挑戦的なプロジェクトとして、関係者一同、智慧と経験を総動員して、一丸となつて取り組んでおります。本年六月の完成までとわずかりました。ご不便をおかけすることもあるかと思いますが、よろしくお願い申し上げます。

二〇一四年十二月



屋根工事開始



外壁下地の取り付けとともに、火災時の延焼をおさえる耐火被覆工事が施される

二〇一五年一月

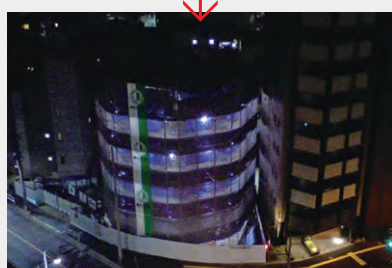
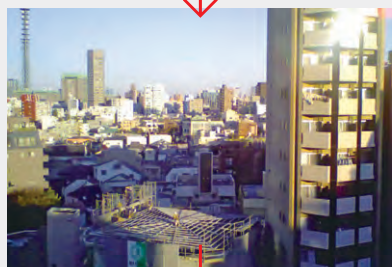


エレベーター棟の螺旋階段設置

二月



エレベーター棟の屋根工事開始。完成に向けて、文由閣の内装・仕上げ工事が始まる



[写真提供]

松井建設：右列上4点 | P3 art and environment：左列6点(2014年10月～12月撮影)

東長寺 檀信徒会館「文由閣」建立記念展

今夏、文由閣建立後、これを記念して、東長寺文化局 P3（ピースリー）にて展覧会を開催致します。文由閣と今後東長寺が推進しようとする諸活動を、広く社会に発表する試みです。皆さまのご来場、心よりお待ちしております。

開催概要

東長寺 檀信徒会館「文由閣」建立記念展

会期…夏頃を予定

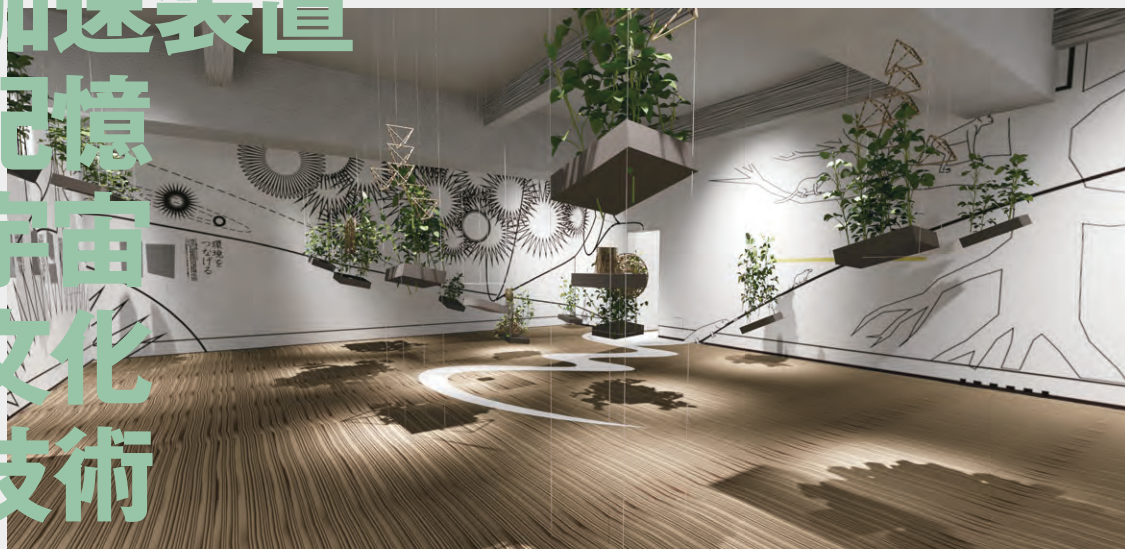
会場・お問い合わせ…東長寺文化局 P3（ピースリー）

03-3353-6866

・東長寺より徒歩1分。向かいのアネックスビル1F。

詳しくは下の地図を参照下さい。

回向 循環的世界 縁起 エネルギー 繋がる糸 加速装置 記憶 宇宙 文化 技術



[プレ・イベント]

東北記録映画三部作『なみのおと』『なみのこえ』『うたうひと』上映会

酒井耕、濱口竜介両監督が東日本大震災の被災地でつくりあげた映画作品を上映します。大震災後の語り尽くせぬ「声」を聞き、未来へとつなげる試みです。人の生の記憶、足跡を次の世代へと結ぶこと、東長寺の考える文化の意義、文化支援の一端をご覧頂けます。三月二十一日[土・祝]には、住職 瀧澤遥風が監督と対談。彼岸会法要にご参加の皆さまは、ぜひこちらにも足をお運び下さい。

会場：東長寺文化局 P3（ピースリー）

- | | |
|------------|--|
| 3月20日[金] | 第一部『なみのおと』19時開演
予約券¥1,500 / 当日券¥2,000 [1ドリンク付] |
| 3月21日[土・祝] | 第二部『なみのこえ 新地町』14時開演 『なみのこえ 気仙沼』16時開演
各回 予約券¥1,500 / 当日券¥2,000 [1ドリンク付]
『なみのこえ 気仙沼』上映後18時より、
映画監督と東長寺住職 瀧澤遥風によるトークイベントを開催致します。 |
| 3月22日[日] | 第三部『うたうひと』14時45分開演
予約券 ¥2,500 / 当日券 ¥3,000 [1ドリンク付] |

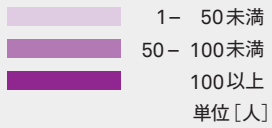


ご予約・お問い合わせ（午前11時～午後18時）：03-3353-6866（P3 / ピースリー） | <http://www.p3.org/>

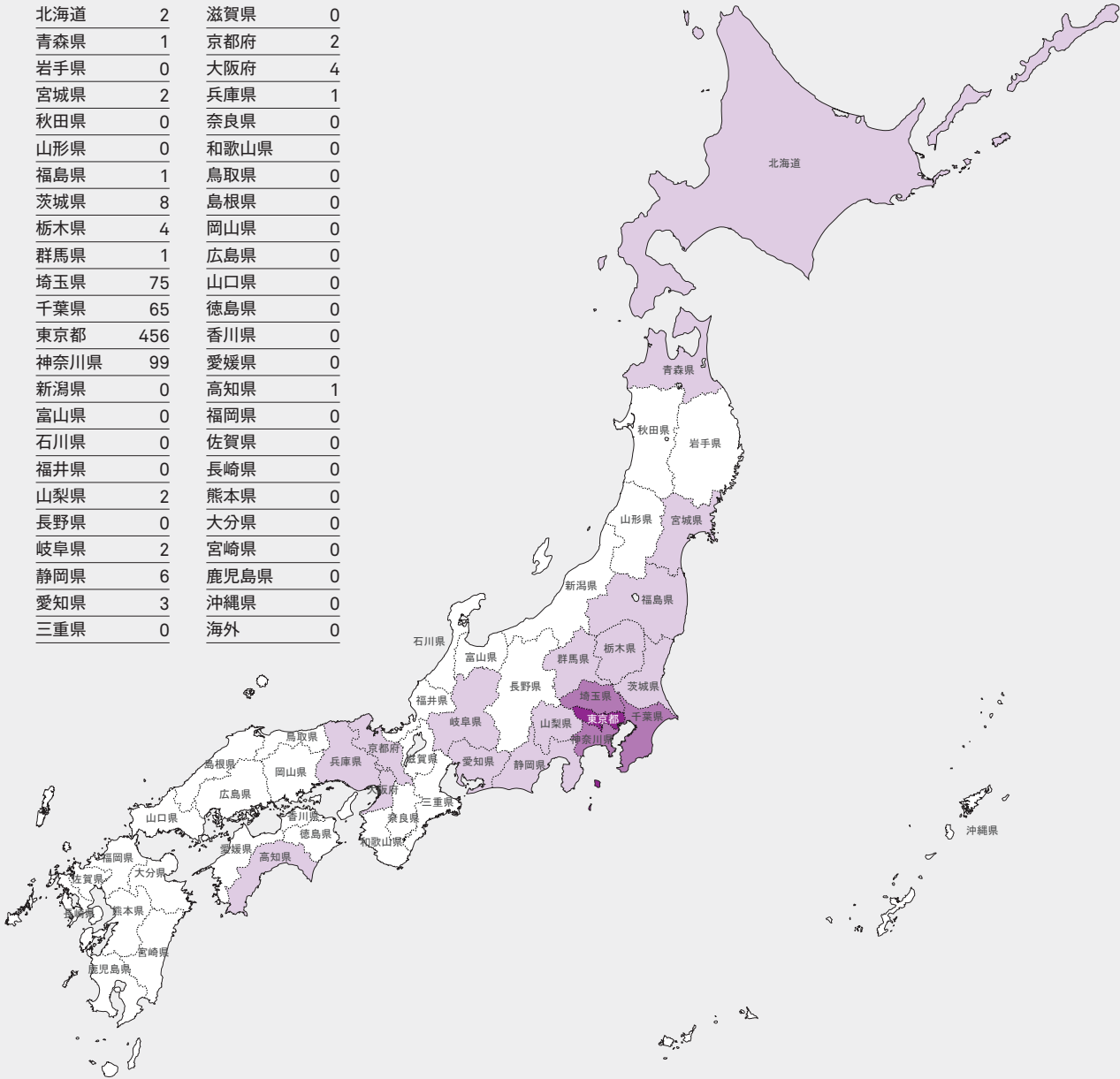
・入場料などの各回詳細は同封のチラシを参照。各回定員制・先着順のため事前予約をお勧めします。

檀家・縁の会会員の居住地マップ

檀家の皆さま



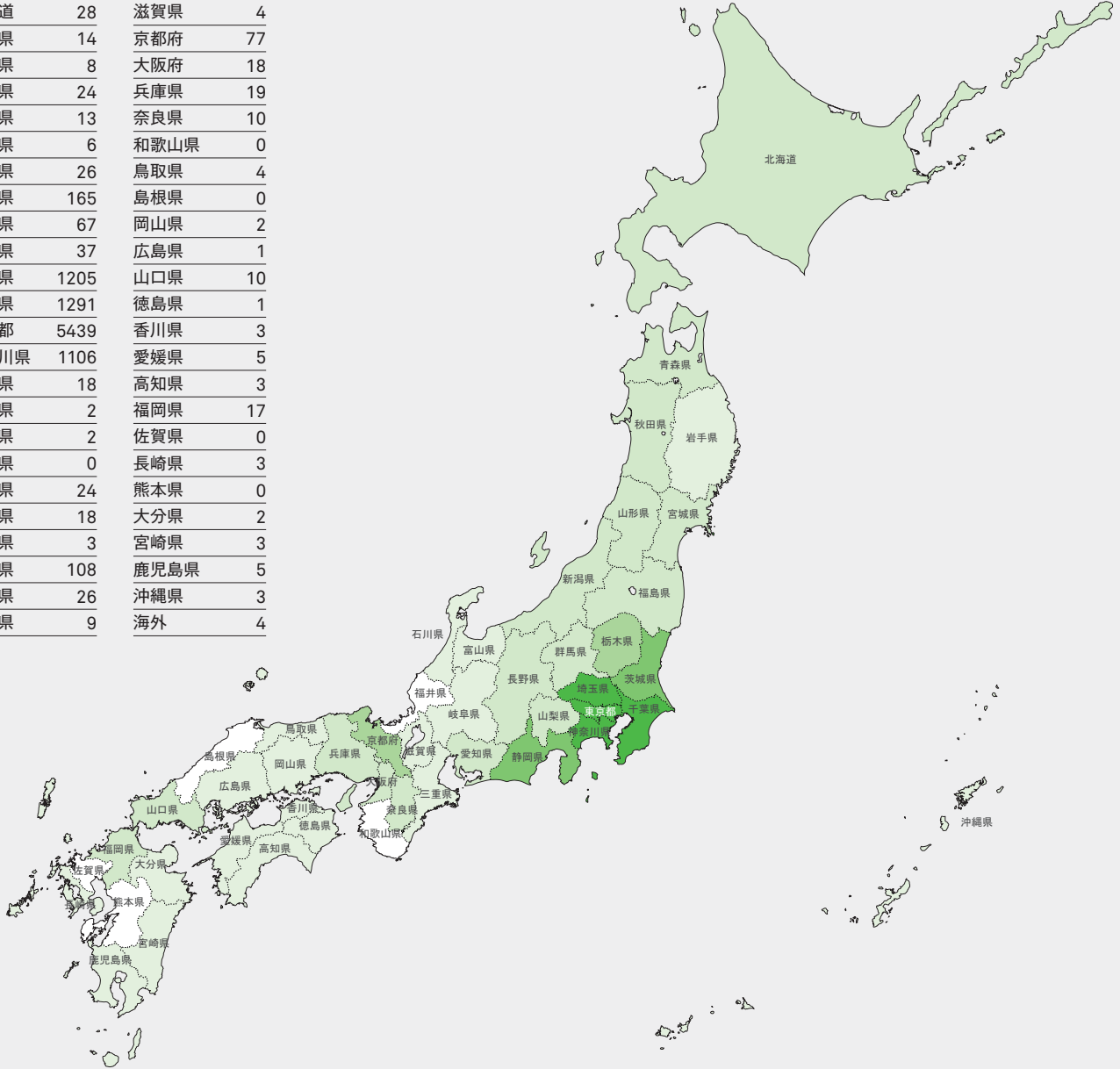
北海道	2	滋賀県	0
青森県	1	京都府	2
岩手県	0	大阪府	4
宮城県	2	兵庫県	1
秋田県	0	奈良県	0
山形県	0	和歌山県	0
福島県	1	鳥取県	0
茨城県	8	島根県	0
栃木県	4	岡山県	0
群馬県	1	広島県	0
埼玉県	75	山口県	0
千葉県	65	徳島県	0
東京都	456	香川県	0
神奈川県	99	愛媛県	0
新潟県	0	高知県	1
富山県	0	福岡県	0
石川県	0	佐賀県	0
福井県	0	長崎県	0
山梨県	2	熊本県	0
長野県	0	大分県	0
岐阜県	2	宮崎県	0
静岡県	6	鹿児島県	0
愛知県	3	沖縄県	0
三重県	0	海外	0



735 (総数)



北海道	28	滋賀県	4
青森県	14	京都府	77
岩手県	8	大阪府	18
宮城県	24	兵庫県	19
秋田県	13	奈良県	10
山形県	6	和歌山県	0
福島県	26	鳥取県	4
茨城県	165	島根県	0
栃木県	67	岡山県	2
群馬県	37	広島県	1
埼玉県	1205	山口県	10
千葉県	1291	徳島県	1
東京都	5439	香川県	3
神奈川県	1106	愛媛県	5
新潟県	18	高知県	3
富山県	2	福岡県	17
石川県	2	佐賀県	0
福井県	0	長崎県	3
山梨県	24	熊本県	0
長野県	18	大分県	2
岐阜県	3	宮崎県	3
静岡県	108	鹿児島県	5
愛知県	26	沖縄県	3
三重県	9	海外	4



9833 (総数)

山内行持のご案内（平成二十七年三月―七月）

フリーダイヤル
0120-3351850は
昨年末にて停止致しました。
ご了承ください。

縁の会―説明会 御寄進、檀信徒会館「文由閣」、新縁の会について

現在東長寺において、さまざまな事業、活動を展開しております。過去四回の説明会を実施致しましたが、次回三月の説明会をもって建立前の説明会を終了させて頂きます。建立後、文由閣内覧説明会とあわせて御寄進の監査報告を行います。詳細は次号萬亀にてお知らせ致します。檀家さま向けの内覧説明会については別途ご案内差し上げます。

・説明内容

御寄進について（寄進の目的、使途、監査など）

檀信徒会館「文由閣」の建築説明（主に用途）

新縁の会の仕組みについて（現在の縁の会との相違、入会金の使途）

・日時

平成二十七年三月十日「火」午前10時30分～（1時間半程度）定員50名

・お申し込み・お問い合わせ（午前9時―午後5時）

縁の会事務局・03-3353-6874

春彼岸会チャリティーバザー

・日程…三月二十日「金」～二十二日「日」午前10時～午後4時

皆さまから頂いた着物や帯、浴衣、毛糸などを利用して、いろいろなものをつくってみました。お手に取り、長く使って頂けたら幸いです。ぜひお立ち寄りの上、ご協力下さいませ。ようお願致します。山内のお供え餅を砕いて、書院の縁側でじっくり乾燥させて揚げた「おかき」も販売致します。個数に限りがありますのでお早めどうぞ。

檀家―檀信徒護持会総会・山門大施食会法要

檀信徒護持会の皆さまを対象とする護持会総会ならびに、山門大施食会法要を左記のように厳修致します。万障お繰り合わせの上、ご参加下さいますようご案内申し上げます。

・日程…五月二十六日「火」

・会場…本堂

・午前11時より 昼食接待

・午後12時半より 護持会総会

・午後14時より 大施食法要

檀信徒護持会総会において、平成二十六年年度決算報告ならびに、平成二十七年度予算案を審議して頂きます。

檀家―観音供養祭

観音堂にお祀りされている方々の御供養を致します。

観音さまはいつでもどこにでも、また、さまざまに姿を変えて私たちの前に現れてお救い下さるといわれています。観音堂にお祀りされている各家のみならず、檀信徒の皆さまも「一緒に観音さまを讃えお祈り致しますよう。」

・日程…六月十五日「月」午前11時より

・会場…観音堂

釈尊降誕会法要

・日程…四月八日〔水〕午前11時45分より
・健康祈願ご祈祷料 三、〇〇〇円
四月八日はお釈迦さまの誕生日。別名「花まつり」と呼ばれています。お釈迦さまにお花を捧げ、甘茶をそいで、お祝いしましょう。当日は、お子さまの誕生と健康を祈願し、ご祈祷を受け付けております。ご希望の方は、お名前を読み上げますので、ハガキにお子さまのお名前・誕生日性別を明記してお申し込み下さい。お札とおみやげを用意しております。

花まつりイベントのご案内

・日程…四月八日〔水〕正午より
釈尊降誕会の法要にあわせ、花まつりイベントを開催致します。ボランティアの方々による手作り作品のバザー、囲碁の会の実技指導、そば打ちの会の実演、折り紙教室・水彩画同好会の作品展示、観世流謡曲教室の発表会、仏教讃歌を歌う会など、東長寺でのさまざまな活動をご紹介します。日頃の成果をご覧頂き、多くの皆さまにもさまざまな活動に参加して頂ければと願っています。なお、当日は縁の会会員・三崎由記子さんのミニコンサートも開催されます。ぜひ、お誘い合わせの上、多数ご参加下さいますようお願いしております。

「チャリティーコンサート」フルートにピッコロやアルトフルート、バスフルートなど、フルート属のみで編成されたアンサンブル演奏をお楽しみ下さい。

・出演…中島恵・海老原智子・北澤史・佐藤智子・小林渉・内藤まりこ

・ゲスト…高部さち
・入場料…募金二、〇〇〇円を申し受けます

「由記子の歌ライブ」童謡、懐メロ、オリジナル曲とバラエティに富んだ曲をお送りします。

・出演…三崎由記子
・ゲスト…羽根川五九夫〔作曲家〕

・演目…雨降りお月さん・忘れな草をあなたに・恋銀座・ほか

時程	内容	会場
10時30分	開場	
13時30分	各種教室発表会	本堂
14時30分	チャリティーコンサート	本堂
15時30分	三崎由記子ミニコンサート	カフェきあん

縁の会―大施食会法要のお知らせ

左記日程にて縁の会大施食会法要を執り行います。大施食会法要とは、あらゆる精霊に食を施し、貪りの心を戒め、生きとし生けるいのちに感謝する法要です。日常生活の中でもこの施食の心が現れますよう、皆さまと共に法要を営みたくご案内申し上げます。

・日程…七月一日〔水〕
・受付…午後2時より
・午後14時30分 説教
・午後15時30分 大施食法要
・午後16時30分 おしのぎ
・供養参加費（お布施） 五千円程度（当日、受付にてお納め下さい）
ご参列の皆さまには、古来より伝わる修法にてご供養致します。また、水の苑回廊にお飾りする五色に彩られた施食幡には、左記のような書式にて志主としてお名前をご記入致します。特にお戒名でのご希望の方には、別途三千円にてご用意させて頂きます。

祈念之精霊

志主 東長太郎

なお、ご都合により参列できない場合でも、ご供養を受け付けておりますので、お申し出下さい。準備の都合上、参列ならびに施食幡のお申し込みは、六月二十五日〔木〕までに、お電話もしくはFAX、ハガキにてお知らせ下さい。皆さまのご参詣を心よりお待ち申し上げます。

・お申し込み・お問い合わせ（午前9時―午後5時）

縁の会事務局…03-33353-6874／FAX…03-33353-7027

縁の会―新盆供養のご案内

故人が亡くなられて、最初に迎えるお盆が新盆です。亡くなられてから初めて、故人がご家族のもとへ帰っていらつやる期間ですので、多くの方がこの新盆を一周忌と同じように大切にされています。ご自宅で精霊棚を用意するのは難しくなりましたので、代わってお寺でお迎えし、故人をご供養致します。当山での回向の後、故人とともにご自宅へお帰りになりお盆をお過ごし下さい。本年度の新盆のご回向は、左記の日程となっております。

・日程…七月七日〔火〕、八日〔水〕、九日〔木〕

各日とも午前10時―午後3時半まで、30分単位でお受け致します。

・ご希望の方は、電話にてお申し込み下さい。

・お申し込み・お問い合わせ（午前9時―午後5時）

縁の会事務局…03-33353-6874

イベントおよび教室のご案内（平成二十七年三月―六月）

フリーダイヤル

0120-3351850は

昨年末にて停止致しました。

ご了承ください。

仏教文化講座

元旦を除く毎月一日は、羅漢堂にて左記の要領で仏教文化講座を開催しています。

檀信徒のみならず、広く一般の方にも参加して頂きますので、皆さまお誘い合わせの上、ご来山下さい。なお、参加費は無料です。

● 毎月一日 開場…午後4時半／開講…午後5時

● 4月1日〔水〕 「文由閣のランドスケープ」 霜田亮祐氏〔ヒュマス代表〕

● 5月1日〔金〕 「文由閣の植栽について」 仲田茂司氏〔仲田種苗園 代表取締役〕

● 6月1日〔月〕 「文由閣の仏像について」 吉田源之丞氏〔大仏師／第十五代 吉田源之丞〕

〔各種教室のご案内〕

坐禅会

● 毎週土曜日

● 時間…午後6時―午後7時半

● 服装…坐禅を行いやすい服装

写経会

● 毎月第2・第4木曜日

● 時間…午後2時半―午後3時半

● 持物…手になじんだ小筆があれば、ご持参下さい。

お経の唱和と経典講読の会

お経の指導と経典講読をしております。今期は

「修証義」を学びましょう。実生活に照らし合わせながら、仏教徒としての生き方を摸索したいと思えます。

● 3月20日〔金〕

● 4月17日〔金〕

● 5月15日〔金〕

● 6月19日〔金〕

● 時間…午前11時半―午後1時

● 参加費…一、〇〇〇円

● 会場…東長寺本堂

折り紙教室

● 講師…湯浅信江先生〔お茶の水おりがみ会館〕

● 3月19日〔木〕

● 4月16日〔木〕

● 5月21日〔木〕

● 6月18日〔木〕

● 時間…午後2時より

● 受講料…三、〇〇〇円〔材料費・お茶代込み〕

● 会場…カフェ「きあん」

水彩画同好会

- ・ 3月12日〔木〕・23日〔月〕
- ・ 4月8日〔水〕・23日〔木〕
- ・ 5月14日〔木〕・25日〔月〕
- ・ 6月11日〔木〕・22日〔月〕
- ・ 時間…午後2時より
- ・ 参加費…一、〇〇〇円
- ・ 会場…カフェ「きあん」

碁縁の会「囲碁の会」

- ・ 3月12日〔木〕・26日〔木〕
- ・ 4月8日〔水〕・23日〔木〕
- ・ 5月14日〔木〕・28日〔木〕
- ・ 6月11日〔木〕・25日〔木〕
- ・ 時間…午後1時より
- ・ 会場…カフェ「きあん」
- ・ 連絡先…042-563-0634〔担当員〕
- 042-467-3081〔担当三橋〕

長麺会「そば打ち同好会」

- ・ 3月23日〔月〕
- ・ 4月8日〔水〕※午前9時集合
- ・ 5月25日〔月〕
- ・ 6月22日〔月〕
- ・ 時間…午前10時より
- ・ 参加費…一、五〇〇円
- ・ 会場…東長寺一階 食堂
- ・ 連絡先…042-557-4632〔担当横山〕
- 042-942-3930〔担当舟木〕

観世流謡曲教室のご案内

- ・ 講師…中島志津夫先生〔観世流能楽師〕
- ・ 3月5日〔木〕・12日〔木〕
- ・ 4月2日〔木〕・23日〔木〕
- ・ 5月14日〔木〕・28日〔木〕
- ・ 6月11日〔木〕・25日〔木〕
- ・ 時間…午後1時半より
- ・ 受講料…六、〇〇〇円〔月毎〕
- ・ 会場…書院二の間

うたごえ茶房 ゆりかご

- ・ 4月6日〔月〕
- ・ 5月11日〔月〕
- ・ 6月〔日程調整中〕
- ・ 時間…午後2時より
- ・ 参加費…五〇〇円〔ワンドリンク付〕
- ・ 会場…カフェ「きあん」

仏教讃歌を歌う会

- ・ 指導…高部さち先生〔藤原歌劇団準団員・ボイストレーナー〕
- ・ 3月20日〔金〕
- ・ 4月17日〔金〕
- ・ 5月15日〔金〕
- ・ 6月19日〔金〕
- ・ 時間…午後2時―午後4時
- ・ 参加費…一、〇〇〇円
- ・ 会場…東長寺本堂

コーラス同好会・法律相談会

都合により、当分の間お休みさせていただきます。

春期彼岸会法要

本年度の春期彼岸会法要は、下記の通り厳修致します。
万障お繰り合わせの上、
御参詣ならびに御焼香下さいますよう御案内申し上げます。

記

3/21[土/祝]	10:30	第1座	檀家・縁の会
	11:30	第2座	檀家のみ
	12:30	第3座	檀家・縁の会
	13:30	第4座	檀家・縁の会
	14:30	第5座	檀家・縁の会

※本年より第5座までとなりました。

•同日、東長寺文化局 P3(ピースリー)にて、映画上映会(有料)を開催しております。
詳しくは本誌25頁をご覧ください。



曹洞宗 萬亀山 東長寺
160-0004 東京都新宿区四谷4-34
(檀 家) 03-3341-9746
(縁の会) 03-3353-6874